

わたくしは誰かの日記を300円で買う

始まらず終わってしまった風強し定時過ぎても明るくて春

呼ばれない名前が掠れて本当の名前はあなたが付けてくれれば

失恋や 桜餅やっぱしょっぱくて「きみって意外とそんなんなんだね」

はちゃめちゃに散財したい日は何故かなんにも可愛く見えないパルコ

本屋では文具コーナーが広がって どうして日記を買ったのだろう

R05.03.19 誕生日クーポン届くあらゆる店から

明確に始まる恋が無くなって 大人はじっくり湯船で塩茹で

「今週の占いコーナーは占い師湯治のため休載となります」

本当のことを書かない日記帳 書きつけていく架空の植物

女兒のまま姿がおとなになったから矛盾している逆さキャッスル

「もし彼がわたしを好きだと仮定して」 馬鹿だなわたし それでも書いた

泣ける本買いに行きます古本がいいな誰かの残留なみだ

不器用だ 自由に泣けない大人だしスニーカーの紐また解けたし

読まれないはずだった日記帳 古書屋の奥でひっそり売られ

名も知らぬおんなの日記 秘め事は秘め事ですか花卉挟まる

S60.03.19 わたくしが生まれたときに失恋した君

温泉が有名な街の路地裏のカフェの猫の名前はクッキー

「十年も経てばきっと彼のこと忘れて誰かと結婚してる」

書き文字が美しかった昭和にもユーキャンあった？日ペンの美子？

「今はまだ泣いております三日分のカレーがあるうちは泣き続けます」

もう猫も君も変わっているだろう 特急電車の切符を買った

何日かお休みします 春風が見つからなくて西へ往きます

逆走する桜前線越えるとき感じるだろうかさくらの愛撫

おんな一人 温泉旅行は失恋と決めつけられた時代の人の
遺書などを書くのもアリだ念のため整腸剤をカバンに詰める
降り立った知らない駅の知らぬ名を写真におさめる知らないひとが
嚏せ返る硫黄の匂い この街で産まれた人は感じられない
温泉の効能としてうたわれる「疲労、リウマチ、黄泉がえり など」
地図を買う GoogleMAPは使わない 今日のラッキーカラーは迷子
知らぬ路地 知らぬ人々 聞き慣れぬこれは方言んじゃけらったば
「酒とめし」 潔すぎる看板に旅行客らは怯えています
「酒とめし」 吸い込まれていく老人の背がしゃっきりと伸びる瞬間
お通しの、これあの何のお肉です？ へええなんだか知らない味で
「この人はよく知らないけど稀によく知らない酒を飲んでる人よ」
好きな人を「好きな人」と呼ぶときのような口当たりのお酒
会社から着信があり威風堂々「飲んでおります」 有給ですし
R05.03.20 ゆかりない温泉街で春雷を聴く
温泉でピンクの象が茹だってるアノマロカリスが露天でのそり
わたくしの日記もいつか古書店に並べてみたい令和の次の
古書や古紙なくなっていく人類の日記はクラウド雲海にインク
「この世とは連綿と続く歴史であ」神様うるさい おはようヒューマン
夢で見た温泉に独り朝靄の かつては龍が飛んだのだらう
溶け出したわたしの出汁が蒸発し街に離散し虹を映すよ
びよびよと鳥の声する鳥の名がわかればいいのに温泉なのに
古ぼけた日記帳に開きぐせ あなたかわたしどちらがつけた
文字たちに故郷を見せてあげましょう どうだい、「あ」くん。いいだろ「ふ」さん。
温泉が有名な街の路地裏のカフェに猫がいた 二代目クッキー

わたくしが生まれた時にこの店で泣いたおんながいるということ
動かない猫だった固めプリンごし揺れてる長尻尾、暗示
あの人は砂糖を何個入れたらろう コーヒーカップのミモザの数だけ
なにもかも値上げされてく三十年経ってもあれよプリンパフェよ
会社から着信があり「今ちょっと泣いております出れん」切断
この世とは連綿と続く歴史でありアノマロカリスも飲んだ珈琲
移住した若い人が作ってるチーズケーキは虹色でしたね
この席に座った人類を空想する あなたからわたしの間を埋める

R05.03.21 カップ酒車窓真っ暗特急電車の

わたくしはわたくしである何度でも春に生まれ直してゐる
簡単に立ち直らないそれでいいわたしは書けるそして読める
通勤のとき降ってくる桜とか鳩とか鰯とか恋心とか
溜まってる仕事なにも考えない クッキー二世は今ごろ寝てる
エクセルのマス目の升に注ぎ込む酒 アテには謎の肉がいいわね
「二十年経ったわたしも生きていてまだ日記は書いていますか」
使用期限三月末の誕生日クーポンつかう 新しいペン

R05.03.31 四月からわたし何者にでもなれる、書く